



たいいしも通信

海自の潜水艦「らいげい」が令和7年3月6日に就役し、同日川崎重工神戸工場で引き渡し式と自衛艦旗授与式がありました。毎度おなじみ防衛関連ニュース第5弾では、皆さん知っているように意外と知らない海自潜水艦についてお送りします。

◆潜水艦の特徴

さて、潜水艦が他の兵器と決定的に違うところは、あるエリア内に「絶対にいない」という確証がなければ、「いる」との同意義であるという点です。とはいえ、世界中の海を掌握することは物理的に不可能であるため、海域を指定して重点的に哨戒します。これが敵性航空機や水上艦艇であれば、既に存在が明らかになっている脅威への対抗からスタートしますが、潜水艦に対しては遥かに時間や労力をかけて広大な海域の風漬しの搜索から始まるのです。また、水中では一般的な波長の電波が到達しないためレーダーは使用できず、また潜航している場合は衛星からの探知も不可能であり、専門の機材を装備する航空機や艦艇でないと搜索することすらできないのです。

◆「らいげい」について

さて、らいげいの話に戻ると、進水式は約3年前の2023年、その後艦装と呼ばれる武器等任務機材を装備して運用試験を行い、やっと今回の就役を迎えました。本艦は、主力潜水艦そうりゆう型(12隻)の後継艦となる最新鋭たいがい型潜水艦の4番艦です。今後は広島島の呉に配備される予定で、海自潜水艦としては12隻が呉、10隻が横須賀となります。らいげいは、全長と全幅はそうりゆう型と同じですが、深さ、基準排水量ともに大きくなり、海自最大の潜水艦となりました。

なお、たいがい型は、これまでの海自潜水艦の「しお(潮)」

「りゆう(龍)」に続く「げい(鯨)」の艦名を持つ3つ目のシリーズとなります。

◆海自潜水艦の特徴

そうりゆう型はディーゼル潜水艦で、低振動で静粛性に優れ、世界でもトップクラスの性能として有名でしたが、たいがい型はさらにその性能向上型となり、探知性能や被探知防止性能が向上し、新型戦闘管理システムにより、より高度な情報処理能力を有しています。また、原子力潜水艦を持たない海自にとって、通常動力型潜水艦の能力向上は常に大きな課題でしたが、たいがい型は、そうりゆう型12番艦に続き、リチウムイオン蓄電池を搭載しています。これは従前の鉛電池の2倍以上のエネルギー密度を持ちますが、取り扱いが難しく、日本が世界で初めて実用化し、今ところ唯一の装備国となっています。

隣国でも潜水艦へのリチウムイオン蓄電池搭載を目指していますが、ご存じのとおり、リチウムイオン蓄電池搭載の自動車や航空機、さらには死亡事故まで発生した工場での火災が連発しており、順調とは言えないようです。

◆今後の海自潜水艦

防衛省は、敵艦艇などに相手のミサイル射程圏外から攻撃できる長射程巡航ミサイルの搭載を目指しており、敵の陸上基地を遠距離から攻撃できるようになります。また、発射方法を従来の魚雷発射管だけでなく、垂直発射装置(VLS)の採用も目指しています。こうした新装備システムを有し、さらに大型化した新型潜水艦が実際に現れるのは2031年以降になるとみられます。

▼編集後記▲▲

実習でいただいた潜水艦の食事が美味しく忘れられません。自分は航空機で冷めた弁当だったのでなおさらかもしれません。例によって、内容に関する責任は全て支部長にあり、特に規則等に定めてあるもの以外は私の個人的見解が色濃く反映されていますので、ご意見等ございましたら遠慮なくお知らせ下さい。